

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520095

研究課題名(和文) 石塔と金石文を素材とする思想史研究の新たな領域と方法の開拓

研究課題名(英文) A Search for a Academic Area and Method of Thought-History Studies Based on Tombstones

研究代表者

佐藤 弘夫 (SATO, HIROO)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：30125570

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、石塔や金石文を資料として、普遍的で民族固有の感覚とみなされがちな遺骨の重視が、実はこの列島で展開した長い歴史の中ですでに形成されたものであったことを明らかにした。

遺骨に対してまったく関心を払うことがなく、遺骸を放置して省みなかった古代の人々。火葬骨を大切に霊場まで運んだ中世の人々。家の墓を作って骨を収め、定期的に墓参を繰り返した近世以降の人々。この三者に、死者や霊魂についての共通する観念を見出すことはきわめて困難である。それは、「日本人の死生観」という形で総括されてきたこれまでの通説が、根本的に見直される必要性があることを示すものにほかならないのである。

研究成果の概要(英文)：People in the ancient days were not interested in remains at all, and neglected them without reflecting. People in the middle ages carefully carried cremated bones to a sacred place. People after the modern days made families' graves to place bones and repeated visits to graves periodically. The attitude of the people who lived on the Japanese Islands has changed dramatically. It is expected to be extremely difficult to find a common concept in regards to dead people or souls among these three parties. This is the very reason that indicates the necessity to fundamentally review the common opinions in the past summarized in the form of "view of life and death by Japanese people".

We need to carefully reexamine the changes of view and concept to dead people developed on the Japanese Islands based on historical materials, without the premise of view of life and death peculiar to the race penetrating through times.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：石塔 金石文 死生観 コスモロジー 納骨

1. 研究開始当初の背景

従来の思想史研究においては、仏教・儒教・神道・キリスト教といった個別ジャンルごとの、高度に理論化された思想体系や頂点的思想家を取り上げたものが圧倒的だった。そのため、ある時代の思想世界の全体像を描く際にも、そうした体系的思想の合算としてそれを行なおうとする試みが主流をなしてきた。

かかる研究状況に対し、申請者は1990年代から、頂点的思想はそれぞれの時代において孤立した思想にほかならず、単にそれを積み上げていくだけでは時代思潮をトータルに再現することは不可能ではないか、という疑問を抱くに至った。

私たちがまずなすべきことは、頂点思想や体系的思想を同時代の歴史的・思想的な文脈に位置づけていくための座標軸となるべき、当時の人々が共有する世界観・価値観の解明ではなかるうか。だが前近代を対象とする場合、特に史料的な制約によって、民衆の世界観までも含む時代思潮を明らかにすることは困難だった。その目的を実現するためには、従来用いられてこなかった大量に残存する日常的な資料から時代の思想像やコスモロジーを再構成していくような、思想史研究の新たな方法の創出が求められている。

石塔や金石文は、かかる観点からの研究において、好個の資料であると予想されるのである。

2. 研究の目的

墓碑・五輪塔・板碑など、この日本列島にはほとんど無数といってよい石塔類が存在する。その数量は文献史料を圧倒するものがあり、そこに刻まれた銘文とともに、ある時代の世界観や時代思潮を捉えようとする際の好個の資料となりうるものと考えられる。しかし、従来、思想史や精神史の資料として石塔とその銘文を用いようとする試みはほとんど皆無だった。

本研究はそうした研究の現状に鑑み、(1)日本の中世に焦点を絞り、大量に残存する五輪塔・板碑などの石塔群を素材として取り上げ、その配置状況や銘文の分析を通じて当時の人々が共有するコスモロジーと死生観を解明し、古代・近世と比較しつつ、その独自性を明らかにすること、(2)以上の考察から明らかにされた中世固有の時代思潮を背景に置くことによって、従来の思想史研究の大半を占めていた、いわゆる鎌倉仏教、神道思想、本覚思想といった体系的思想に、新たな角度から意義と意味を見出すことを目指すこと、(3)本研究を日本中世という特定領域の研究にとどめることなく、

石塔などの非文字資料や金石文などの体系化されないテキストを用いていかに時代思想の方法論の問題として深化させ、その成果を国内外に発信すること、の3点を基本目的とするものである。

3. 研究の方法

本研究は、石塔とその銘文などの分析を通じて時代のコスモロジーを解明しようとするまったく新たな思想史研究の試みである。またその成果を方法論一般の問題として深化し、海外に発信していくことを目的とした。

したがって、(1)本研究の目的に添った形で石塔・金石文などの基礎データの収集・整理とその分析、(2)その成果を踏まえた国内外の研究者との研究打ち合わせと討論、(3)研究成果の国際学会での発表、を研究計画の骨子とした。

石塔だけを取り上げるのではなく、石塔を取り巻く宗教空間全体と歴史的コンテクストのなかで石塔の意味を探るという手法を用い、さらにその空間の聖性の変質の問題にも着目するため、六郷満山(大分県)・慈光寺(埼玉県)・朝熊山(三重県伊勢市)・元興寺(奈良県奈良市)・名取(宮城県名取市)などいくつかの具体的なフィールドを設定し、現地調査と理論研究を並行して推進した。

石塔については、主として歴史考古学の分野で、これまでその製作方法・素材・碑銘などについて詳細な研究が進められてきた。またその建立地や景観との関係については、日本史や美術史・建築学の分野で近年精力的に研究が進められている。

本研究遂行にあたってはそうした国内外の周辺分野の研究者との連携が不可欠であるため、それらの分野との連携を深め、研究打ち合わせや共同での調査を行った。

従来の研究では、板碑は基礎資料として用いてきたものの、そこでは石塔そのものの研究が目的化されて、そこから時代思潮やコスモロジーを読み取るようとする試みは、ほとんどないといってもよい状況だった。石塔-金石文を素材とする本格的な思想史的研究の提唱とその探求はまったく他に類を見ない独創的なものであり、資料論の上からも方法論の問題としても、研究界に大きな論議を呼び起こした。

墓碑などを素材とする文化史的研究として、ヨーロッパではフィリップ・アリエスの著名な研究があるが、思想史・精神史の方法としてはまだ改善の余地があると考えており、本研究は文献以外の資料を資料とする研究としてはアリウスとそれ以降の欧米の研究を凌ぐ、当該分野における現今の世界最高水準の成果を目指した。

4. 研究成果

(1)

日本を代表する民間行事にお盆がある。この期間中に列島中で行われるさまざまな民俗行事は、日本人の死生観を考える上できわめて重要な事例であるとみなされている。そのため、これまで民俗学や宗教学を中心に多くの研究がなされ、「日本的」な特色としてさまざまな点が指摘されてきた。たとえばその一つに、日本人は骨を大切にす民族であるという見解がある。私たちが帰省する目的は先祖の墓への墓参だった。その墓には近親者の遺骨が収まっている。しかし、私たちが抱く遺骨に対する愛情と執着は、果たして遠い過去から一貫して日本人の特色だったのだろうか。

墓地のあり方に焦点を合わせて、もう少しこの問題を掘り下げてみよう。

今日、日本人は確かに骨をとて大切にしているように見える。第二次大戦終了後60年を経たいまにおいてさえ、戦死者の遺骨の収集は続けられている。遠い異国の地で親族が亡くなった場合、せめて一片の骨だけでも持ち替えたいという心情は、私たちが共有する感覚である。家の墓地にしかるべき故人の骨を収めてはじめて、遺族は安らかな気持ちを与えることが可能となるのである。

けれどもそうした感覚は、決してこの列島上で普遍的に育まれてきた観念ではなかった。たとえば11世紀ぐらいまでは、天皇家や貴族・高僧などごく限られた一部の人々を除いて、墓が営まれることはなかった。庶民層の死体は特定の葬地に運ばれると、簡単な葬送儀礼を行った後、そのまま放置されて犬やカラスのついでにむすまにされた。裕福な人々の間では土を掘って埋葬し、土饅頭型の墳墓を造ることも行われたが、現代のように定期的に墓参が行われることはなかった。時が流れれば、墳墓もだれのものかわからなくなってしまおうというのが、当時の実情だった。死後は故人の骨や遺体に関する関心がほとんど失われてしまったのである。

これに対し、12世紀ごろから新しい葬送儀礼が始まる。聖地＝霊場に対する納骨の信仰である。だれかが亡くなった時、身内のものが火葬骨を袋に入れて首にかけ、特定の霊場に収めるといふ風習が確立するのである。霊場に対する納骨は最初に高野山や比叡山で始まり、やがて全国各地に広がっていく。いまは当時の様子を偲ぶべくもないが、奈良の元興寺極楽坊もかつては納骨の寺だった。中世には納骨の容器が、堂内をすき間なく埋め尽くしていたのである。

納骨信仰には、死後も継続する遺骨に対する縁者の関心を見てとることができる。それ以前の人々が死体や遺骨に見向きもしなかったのに対し、骨を携えて霊場に運ぶという行為には、残された骨になんらかの宗教的な意義を見出していた様子を窺うことができ

る。しかし、納骨信仰の場合でもひとたび骨が霊場に収められてしまえば、それ以降骨の行方に関心が払われることはなかった。

日本において遺体・遺骨に対する態度がもう一度大きく転換するのは、戦国時代から江戸時代の前期にかけてのことだった。庶民層にまで、永続的に受け継がれるイエ（家）の制度と観念が確立するようになり、それを背景として家の墓地が広く一般化していく。今日にまで続く「一家の墓」の濫觴である。死者は家の墓地に埋葬され、子孫による定期的な墓参の習慣が確立する。骨を収める墓には先祖が眠り、そこを訪ればいつでも故人に会うことができるという現代人に通ずる感覚が、しだいに社会に定着していくのである。それは逆の言い方をすれば、自分もまた、死後は墓の中から懐かしい人々の生活ぶりを見続けることができるという意識の目覚めにほかならなかった。

遺骨に対してまったく関心を払うことなく、遺骸を放置して省みなかった古代の人々。火葬骨を大切に霊場まで運んだ中世の人々。家の墓を作って骨を収め、定期的に墓参を繰り返した近世以降の人々。一この列島に住んできた人々の死者に対する態度は、これほどに激変している。この三者に、死者や霊魂についての共通する観念を見出すことはきわめて困難であることが予想される。それは、「日本人の死生観」という形で総括されてきたこれまでの通説が、根本的に見直される必要があることを示すものにほかならない。日本人は骨を大切にす民族であるという俗説は、遺体を放置することが当たり前だった古代には通用しない。私たちは時代を貫通する民族固有の死生観の存在を前提とすることなく、もう一度史料に即して、この列島で展開してきた死者に対する意識と観念の変化の実態を丹念に発掘していく必要があるのである。

(2)

それでは、いま見てきたような骨や死体に対する態度の変化の背後に、私たちはいったいどのような死生観の変容を読み取ることができるのであろうか。

墓地を営まない古代人の場合から考えてみよう。当時の史料には、人間について霊魂と肉体という二つの構成要素から成り立っているという認識が広く散見される。人間を霊と肉とによって構成される存在とみる思想は、古今東西を問わず広く見られるものだったが、日本の古代においても、魂は肉体に内在しており、それが離脱して帰ることが不可能になった状態がその人物の死を意味するものと考えられていた。

ひとたび死が確認されたとき、次に直面する最重要の課題は霊魂の安息をいかに実現するかという問題だった。残された肉体や骨は魂の抜け殻であり、もはやただのモノにすぎなかった。古代において、葬地に運ばれた

遺体が放置されたままふたたび顧みられることがなかった背景には、遺体をモノと見るこうした観念があったと推測される。また古代仏教が遺体の処理にまったくタッチすることなく、もっぱら靈魂の成仏を任務としていたのも、遺骸を軽視するこの時代の社会通念に規定されてのことだった。

魂が離脱した遺骸をモノとして取り扱っていた従来の葬法に対し、12世紀になると霊場が成立し、そこへの納骨信仰が開始される。古代的な社会構造から中世的なそれへの転換が進行する12世紀は、思想や世界観の面でも大きな変動期にあっていた。仏教の本格的受容と浄土信仰の浸透に伴って、平安時代の後半から此土と隔絶した遠い彼岸世界の観念が膨張し、院政期に至ってこの世と断絶した死後に往生すべき世界浄土の観念として定着をみるに至る。古代的な一元的世界観に対する、他界-此土の二重構造をもつ中世的世界観の形成である。多くの人々は死後、極楽に代表される理想の浄土に往生することを、人生の究極の目標と考えるようになるのである。

こうした世界観の転換に伴い、奥の院に祀られた聖徳太子・弘法大師などの聖人は、彼岸の仏の垂迹として人を浄土へと導く存在であると規定された。彼らのいる空間(霊場)はこの世の浄土であるとともに遥かなる彼岸の浄土への入口であり、そこへ足を運び祈りをささげることによって、他界浄土への往生が可能になると説かれた。霊場に骨を納めることによって死者の救済が約束されるという観念も、こういった見方の延長線上に成立するものにほかならない。弘法大師が入定していると信じられた高野山の奥の院に納骨が行われた理由も、ここにあった。

骨を後生大事に携えて霊場まで運ぶという行動の背景には、少なくとも霊場に到達するまでは骨に靈魂が留まっている、という観念が共有されている必要がある。ここから私たちは、死後も一定の期間靈魂はそのまま骨に留まり続けるという、新たな観念の成立を読み取ることができる。生死いずれの状態であっても、魂が容易に骨肉から離れた古代とは異なり、中世では骨と魂との結びつきはより永続的で強固なものになっている。ただし、ひとたび靈魂が遠い世界への往生を遂げた暁には、骨は靈魂の依り代ではなく、ただの残骸に過ぎなかった。霊場に収められた遺骨が継続的な供養の対象とならなかった背景には、こうした認識があったと推定されるのである。

(3)

13世紀から14世紀にかけて東日本において大量に制作される板碑も、彼岸の仏の垂迹であり、人を浄土に導く装置であると信じられていた。

12世紀に成立する『餓鬼草紙』には、五輪塔はじめさまざまなタイプの塔婆が立つ

墓所の光景が描かれている。死者の供養のため遺骸を埋葬した場所などに追善の塔婆を建立することは、仏教者や貴族たちの間では、平安後期にはごく一般的な習俗と化していた。供養塔としての塔婆の普及には、塔婆建立の功德を説いてそれを後押しする仏教者の存在があった。唱導の名手澄憲の説法を記した『澄憲作文集』には、現当二世(今世と来世)の安穩に果たす「塔婆」や「卒都婆」建立の功德が説かれている。

塔婆建立が往生浄土のための善根であるという主張の背景には、塔婆自体が仏と同等の存在であるという認識があった。覚鑿が『五輪九字明秘密釈』で詳しく論じているように、密教では五輪は仏と同体だった。五輪塔以外でも、仏のシンボルである梵字や仏の姿を描いた塔婆は、仏の威力や悟りの真理を目に見える形でこの世に具現したものであり、聖なる存在であった。それゆえに、塔婆は生者・死者ともに救い取る力を備えていたのであり、それが建立される地は、有縁の「靈界を浄土に引導」する「靈験の仏地」(『修善講式』)と観念されることになったのである。

中世において板碑は「石塔婆」「卒塔婆」とよばれていた。その正面には、仏を意味する梵字の種子が刻まれるのが常だった。仏のシンボルである梵字を刻印された板碑は、仏そのものだった。そのためそれを建立し崇敬するものは、仏像を建立することと同等の利益をえることができると信じられた。仙台市宮城野区出花にある「バン」(金剛界大日如来)の種子をもつ延慶4年(1311)の板碑は、「率都婆」は「大日遍照の本地、常住の妙体」であり、「過去慈父幽霊七世安穩」のためにこの「尊像」を顕した、という銘文をもっている。ここでは板碑=率塔婆=尊像という認識が端的に表明されている。東松島町にある弘安2年(1279)の「阿弥陀三尊来迎図像板碑」のように、種子の代りに仏の図像そのものが刻まれた板碑も見受けられる。

中世においては、この世に現れた仏(仏像)は彼岸の本仏が此土の衆生を救い取るために出現した垂迹だった。それゆえ仏像を建立することは、この世に来世への通路を設ける行為であり、往生浄土に直結する善行であると信じられた。平安時代の後期に丈六の阿弥陀仏像とそれを納める阿弥陀堂の建立ラッシュが起こった理由はそこにあった。

板碑が仏像と等質のものと把握されていたとすれば、板碑もまた垂迹にほかならない。その所在地はこの世の浄土であり、遠い浄土の入り口だった。浄土信仰と板碑が結びつく理由はここにあったのである。

(4)

中世後期から近世初頭にかけて、この列島の思想世界は再度巨大な変動を体験する。中世前期において圧倒的なリアリティを有していた他界浄土の観念が縮小していくのである。往生の対象としての遠い浄土のイメー

ジが色あせ、現世こそが唯一の実態であるという見方が広まっていく。その結果、死者の安穩は遠い浄土への旅立ちではなく、この世界の内部にある墓地に眠り、子孫の定期的な来訪と読経の声を聞くことにあると信じられるようになった。死者はその遺骨とともに、永遠に墓地に留まり続けるのである。「草葉の陰で眠る」という現代人が共有する感覚は、こうした世界観の転換を経て、江戸時代以降に徐々に形成された観念だったのである。

私は本研究において、普遍的で民族固有の感覚とみなされがちな遺骨の重視が、実はこの列島で展開した長い歴史の中でしだいに形成されたものであったことを明らかにした。それが歴史的に形成されたものであるとすれば、それは当然今後変容していく可能性を有するものとなるであろう。実際にその変容の兆しは見え始めている。近年注目されている自然葬や樹木葬は、その代表的なものといえる。

自然葬は遺骨を細かく砕いた上、海や山などに散布する葬法である。墓を造ることなく、遺骨を自然に返す形式をとるために、「自然葬」とよばれている。一方樹木葬は墓地として認定された里山に遺骨を埋納するもので、目印として雑木を植えるだけで永続的な墓標はいつい建てられることがない。高度成長の中で問題化した、大規模な墓苑開発による自然破壊や伝統的なイエの解体は、伝統的な葬法と墓地経営に根本的な見直しを求めものとなった。自然葬や樹木葬はそうした反省から生まれてきたものだった。大自然の中での散骨はすでに『万葉集』にも見えている形式であり、近年の方法は一種の先祖返りという意味をもっているようにもみえる。

いまの日本の墓地の主流を占める家の墓も、広く世界に目を向ければきわめて特殊な形態といわざるをえない。インドで一般的に行われているように、遺骸を河に流して墓を造らない方法もまれではない。だが、墓を設けないことが死者に対する軽視を意味するかといえば、決してそうではない。それは文化の違いにほかならない。葬儀の方法は時代と地域によって千差万別であり、常に変化していくものであって、これではいけないといった約束事は存在しないことを、改めて確認しておきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計14件)

佐藤弘夫、「南奥羽の板碑と霊場」『講座東北の歴史』5、査読無、2014年、107-130

佐藤弘夫、「聖なるものへ」『岩波講座日本の思想』8、査読無、2014、3-28

佐藤弘夫、「江戸の怪談にみる死生観」『死生学年報』2013年号、査読無、2013、49-65

佐藤弘夫、「幽霊の誕生-怪談から見直す日本文化論」『日本学研究』(北京日本学研究中心)23、査読無、2013、7-15

佐藤弘夫、「神・彼岸・コスモロジー-歴史学における「空間」の発見」『空間史学叢書』1、無査読、2013、9-24

佐藤弘夫、「本地垂迹の近世-ヒトガミ信仰という視座から」『「神仏習合」再考』勉誠出版、無査読、2013、215-242

SATO, HIROO、「The Emergence of SHINKOKU(Land of Gods) Ideology in Japan」*Buddhism and Nativism* (Brill), 無査読、2013、29-49

SATO, HIROO、「Where to next for Shinkoku thought?」*Contemporary Japan*, 25-1、無査読、2013、87-104

佐藤弘夫、「親鸞の聖徳太子観」『中世文化と浄土真宗』思文閣出版、無査読、2012、218-235

佐藤弘夫、「未来予知の作法」生活と文化の歴史学1『経世の信仰・呪術』竹林舎、無査読、2012、335-358

Sato Hiroo、「Kami that Beckon from the Far Shore」*Bulletin of Death and Life Studies*8、無査読、2012、37-61

佐藤弘夫、「総論 古代の思想」『日本思想史講座』1、無査読、2012、11-26

佐藤弘夫、「本地垂迹」『日本思想史講座』1、無査読、2012、363-392

佐藤弘夫、「論理・精神・コスモロジー」『日本の哲学』13、無査読、2012、40-54

[学会発表](計24件)

佐藤弘夫、基調講演「生と死のあいだ-介護・取り・葬儀」、オープンパートナーシップセミナー：介護・看取りの現場に根ざす新たな思想史・文化史研究の構築、2013年11月3日、中国社会科学院(中国)

佐藤弘夫、基調講演「日本と東アジアのカミを考える」、国際シンポジウム：関係性における日本・韓国、2013年10月5日、台湾大学(台湾)

佐藤弘夫、基調講演「ゆるキャラの逆襲-サブカルから見直す日本文化論」日中若手研究フォーラム、2013年9月20日、北京日本学研究中心(中国)

佐藤弘夫、「蛇形のアマテラス」、東亜道文化国際学術研究会、2012年7月8日、北京大学(中国)

佐藤弘夫、「幽霊の誕生」、カリフォルニア大学セントバーバラ校講演会、2012年2月21日、UCSB(アメリカ)

佐藤弘夫、基調講演「日本列島の死生観」、大韓日語日文学会国際学術発表会、2011年11月6日、新羅大学(韓国)

佐藤弘夫、基調講演「東北アジアにおける多文化共生の伝統」、国際シンポジウム「東北アジアにおける多文化共生」2011年8月4日、内モンゴル大学(中国)

〔図書〕(計15件)

佐藤弘夫、『鎌倉仏教』ちくま学芸文庫、
2014、263頁

佐藤弘夫、『ヒトガミ信仰の系譜』岩田書
院、2012年9月、232頁

佐藤弘夫、『日本列島の死生観』(韓国語)
図書出版ムン(韓国)、2011年、359頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 弘夫 (SATO, HIROO)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：30125570